



第243号

発行 埼玉県神社庁  
 さいたま市大宮区高鼻町1-447-1  
 電話 048(643)3542  
 編集 庁報室  
 印刷 株式会社コミュニケーションズ

目次

危険な隣国を持つ我が国の海洋安全保障政策	2
令和四年度神宮大麻暦頒布始奉告祭各支部報告	4
神宮大麻に関する教化の課題と展望 — 埼玉東支部の意見交換会を切り口に —	7
伊勢神宮新穀感謝祭参列について	9
より強くなった祖国への思い	10
埼玉県神社庁新嘗祭	11
令和四年度「教養研修会」開催のお知らせ	11
告知「神主さんと神社を学ぼう!」について	12
庁務日誌抄	12
埼玉からのお伊勢参り — 平野家文書「伊勢道中日記覚」より —	13



武蔵一宮氷川神社 初詣風景(1月2日)

## 危険な隣国を持つ我が国の海洋安全保障政策

山田 吉彦

我が国「日本」は、四方を海に囲まれた海洋国家である。歴史的に見ると、我が国は、海に守られ平和を保ち国土は守られてきた。しかし、第二次

世界大戦以降、武器兵器の能力が向上し、海という堀を超えることも容易となってきた。近年は、弾道ミサイル無人機サイバー攻撃電磁戦などにより、我が国の領土領海領空が脅かされている。実際に北朝鮮は、頻繁に日本海に向けミサイルの発射訓練を行い、我が国の排他的経済水域（EEZ）内に撃ち込む事態となっている。この落下は、偶発的なものではなく、日本海における日米の潜水艦の動きを意識した計画的なものであり、ウラジオストクに拠点を置くロシア海軍と連携しているとも考えられる。また、我が国上空を通過し、国民を震撼させることもあった。北朝鮮による韓国への軍事的な挑発は激化している。韓国、北朝鮮ともに、無人機を飛ばし、情報収集をするように、威嚇的な行動をとっている。このままだと、近い将来に朝鮮戦争が再発することが危惧される。さらに、北朝鮮は、核兵器の開発を進めている。核戦争に発展する危機も考えられる。我が国は、朝鮮半島において戦乱が起きることを想定し、日本国民に被害が及ばないように準備を怠ってはいけない。特に多くの日本人漁民が出漁する日本海に戦乱を持ち込ませてはならないのだ。

隣国を選ぶことはできない。日本の隣国は、ロシア・韓国・北朝鮮・中国など、日本になんらかの脅威を与えている国々が多い。

ロシアは、北方領土を占領したままである。現在は、ウクライナとの戦争において自重を求める我が国を敵国とみなし、北方領土返還交渉の窓口を閉ざした。北方領土周辺海域では、ロシアによる漁業規制が行われ、本来、日本の海であるにも関わらず、日本漁船が締め出され、金銭等を提供することで漁業が認められている海域も多い。ロシアによる漁業取締は厳しく、漁船が拿捕され、乗員はロシアの支配地に連行され、罰金を取られ、漁船を没収されることもある。平成十八年には、国後島周辺海域において北海道根室市の若い漁師が、密漁の疑いにより銃撃され、命を奪われる事件が起きている。今もロシアによる漁業取締は、北海道東部の漁師にとつて恐怖の対象となっているのだ。

領土を不当に占領している国との間で、友好関係を築くことは難しい。しかし、多くの日本人は、友好関係ばかりを強調し、侵略行為に目を瞑ってしまっている。だが、ロシアによるウクライナ侵攻は、侵略国の脅威を日本人に教えることになった。不用意に領土問題において妥協することは、領土を失うのみならず、国土に戦乱をもたらし、多くの国民の命をも奪うのである。さらに、平和を取り

戻すためには、侵略者が諦めて手を引くまで、戦い続けなければならないのである。

そのことは、韓国も同様である。韓国は昭和二十六年に日本海に浮かぶ「竹島」を占領し、現在は軍事拠点化している。竹島は、昭和二十七年に結ばれた第二次世界大戦の戦後処理を合意したサンフランシスコ平和条約においても、日本の領土であることが認められている。しかし、国際社会の判断を不服とした韓国は、竹島を軍事占領したままなのである。また、韓国軍が自衛隊機にレーダーを照射した問題などでは、自国の非を認めず、攻撃的な姿勢を続けている。さらに、第二次大戦時の徴用工問題などにおいては、補償等により解決済みであるにも関わらず、更なる要求を示すなど国際常識に従わない部分が見受けられ、国家間の信頼関係の構築が難しい。

韓国では、若年層を中心に親日的な人も多いが、政府が政権維持のため高齢者層を意識した反日的な政策を執ることが、時折見受けられる。また、国内において反政府の機運が盛り上がり、その矛先を逸らすためか、日本に対する攻撃的な主張を行うように感じられる。韓国に対しては、北朝鮮との関係も踏まえ、日本との関係において国際社会を意識した冷静な対応を求めたい。

北朝鮮は、前述のように我が国の脅威となるミサイル実験を続けている。また、数年前までは日本の中央部にあり、我が国のEEZにかかる「大和堆」に漁船団を送り込み、日本の漁場をも荒らした。さらに、拉致問題が未解決であることは忘

れてはならない。

現在の我が国にとって、最も脅威となっている国は中国だろう。中国の海洋侵出は留まるところを知らない。南シナ海においては、人工島を建築し既に軍事拠点化している。さらに、中国の南シナ海における行動を国際法に反する行為として、抑制を求めた国際仲裁裁判所の判決を黙殺したのである。自国の主張に反するものは、受け入れないのが現在の中国である。中国は国際連合安全保障理事会の常任理事国であり、安保理の決議に対する拒否権を持つ。そのため国連は、中国の国際法違反に対し実効的な制裁を科すことは難しいのである。

昨年、中国の最高指導者である習近平国家主席は、中国共産党の総書記として異例三期目に入り、実質的な独裁体制に入っている。習近平国家主席は「中国の夢」と称し「中華民族の偉大な復興」を目指している。そして「一带一路」という中国を中心に据えたユーラシア大陸を一体化した経済圏の構築を目指しているのだ。それは、十五世紀初頭、明の時代、鄭和の率いる大艦隊が、東アジアからインド洋沿岸、北アフリカまで影響を示した時代を一つのモデルとしている。そして、「海洋強国」となることを目指し、海軍力と海上警備力の強化及び一元化を進めている。この習近平政権は、台湾侵攻を最大課題として取り組んでいるようだ。

中国が台湾を侵攻するためには、台湾の後ろ盾となっている米国と台湾を引き離さなければならぬ。そのためには、まず、米国と同盟国日本が制

海権を握る東シナ海への影響力の獲得を目指す必要がある。その足掛かりとして目を付けたのが、尖閣諸島である。かつて、中国は東シナ海の海底に存在すると言われた油田の獲得を目指し領有権を主張していた。しかし、現在は、尖閣諸島を占領し、東シナ海を睨み台湾侵攻の拠点となる軍事施設を作ることを目指している。

令和四年、中国は、八重山諸島海域の日本のEEZに向けミサイルを発射した。このミサイルは、日本と台湾との中間線付近の海域に向け正確に発射されていた。この行為は、平和を維持する一線を越えた攻撃的な行為である。

中国は、海上警備機関である海警局の警備船（海警船）を連日、尖閣諸島海域に送り込み頻繁に領海侵犯をしている。令和四年には、七六ミリ砲を搭載した軍艦並みの警備船を送り込んだ。我が国の海上保安庁の巡視船は、四〇ミリ砲もしくは二〇ミリ砲の搭載であり、武装能力は比較にならないほど、中国が上回っている。また、人民解放軍の軍艦も侵入させている。

我が国は、依然として尖閣諸島を民間人の上陸を認めない無人島にしたままだ。海上においては、海上保安庁が必死となり海警船の活動を抑止しているが、国際社会に問うた場合、島の管理状況は、日中等である誤解されかねない。さらに、中国海警局は中国共産党中央軍事委員会の指導下において海軍と共に行動する組織、軍事機関に準ずる組織となっている。既に海上保安庁の対応能力を超えているのだ。

我が国政府は、海上保安庁の予算を増額し、巡視船艇を整備しているが、日本の管轄海域の面積は、世界でも六番目の広さを持つほど広大であり、ロシアや北朝鮮への対応も考ええると装備増強で対処しきれないものではない。海上安全保障、海上警備に関する方針を根本から見直し、自衛隊が連動し、日本の海を守り切れる体制を構築する必要がある。

尖閣諸島を市の行政エリアに持つ沖縄県石垣市は、尖閣諸島の海洋調査を行い、市が独自に我が国に施政権があることを打ち出した。調査の内容は、国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）に基づく海洋環境に重点が置かれ、米国などからも支援の声が上がっている。国が上陸しての調査を許可しないため海洋調査だけにどまっているが、石垣市は、政府に対し引き続き上陸しての環境調査の許可を求めている。

また、同諸島の魚釣島には、第二次大戦末期に米軍から攻撃を受けた疎開船が漂着し、救助を待つ間に死去した方々の遺骨が眠っている。市としては、この方々の慰霊と埋葬の許可を求めている。地元の人々の思いと生活の安全を考慮し、政府として積極的に動くことを期待する。

日本という美しい国と国民の安寧を守るためには、国家として一元化した守る力を持ち、積極的な行動が必要である。まずは、憲法を改正し、国民生活を自ら守られる体制を作ることが不可欠だ。

(東海大学海洋学部教授)

# 令和四年度神宮大麻暦頒布始奉告祭各支部報告

## 北足立支部

宮本 洋平

十月二十七日、神宮大麻全国頒布百五十周年を記念し、武蔵一宮氷川神社（東角井晴臣宮司）祈禱殿において、北足立支部神宮大麻暦頒布始祭を斎行した。

斎主を新田朗副支部長、典儀を吉田孝年副支部長、副斎主を石山貴宣、祭員を嶋田土支彦・真取正崇が奉仕した。

また、伶人・舞人として氷川雅楽会より、龍笛 遠藤胤也、箏 池永衛治、笙 朝日 鋭、舞人 岩崎千優が務めた。



北足立支部 神宮大麻暦頒布始祭

高麗文康庁長を始めご来賓の方々にご参列を賜り、吉田正臣支部長以下神職、北足立郡市総代会理事など五十名程の参列となった。神事は新田斎主により厳修に執り行われ、無事に神宮大麻暦が斎主より吉田支部長に授けられ、続いて、吉田支部長より頒布奉仕者代表の大野隆司北足立支部総代会長に授与され、神事の全てが終了した。その後、清水園にて盛大に直会を開催した。

(北足立支部事務局長)

## 人間東支部

原 泰明

十一月二十一日、川越氷川神社（山田禎久宮司）に於いて令和四年度人間東支部大麻頒布始奉告祭が行われた。

奉告祭に先立って行われた臨時総会においては、馬場裕彦本宗奉賛委員長が神宮大麻増頒布施策として掲げる「OneポイントUP運動」について説明がなされた。

大麻頒布始奉告祭は、コロナ禍のため二年間、支部長・副支部長・事務局のみの参列で行っていたが、本年は感染状況も落ち着いていることから、管内宮司十八名、馬場委員長の参列により行われた。

また、本年は神宮大麻全国頒布百五十周年に当たることもあり、久保田一男人間東支部神社子総代会長、小林猛・加治拓男両副会長にもご参列いただいた。

奉告祭終了後、氷川神社直会殿において直会を行った。総代会正副会長からは、神宮大麻が神宮、各都道府県神社庁、そして各支部で祭典を行って頒布されていることを初めて知ったなどの話があった。今後、支部総代会理事にも参列をお願いし、神宮大麻増頒布へ向けて、広くお祀りする大切さを伝えていくことにしている。

(人間東支部事務局長)

## 人間西支部

宮本 剛義

十月二十五日、人間西支部神宮大麻頒布始祭が高麗神社（高麗文康宮司）にて斎行された。



人間西支部 神宮大麻頒布始祭

当日は枝雀邦茂支部長が斎主を務め、副斎主を倉片彩、典儀を保々宗一が務め、横田正司副支部長以下、支部神職二十一名が参列した。

頒布始祭終了後は、今後の入間西支部の行事予定や年末年始の動向などを伝える場を設け、各議題に沿って意見交換を行った。

入間西支部では、神宮司廳からの神宮大麻を、一時高麗神社に保管していただき、頒布始祭の数日前に事務局員等の担当によって支部神職それぞれのその年の希望数を分け、個々に授かりに参ることとなっている。

(入間西支部事務局長)

### 比企支部

甲 田 豊 治

十月二十五日、比企支部神宮大麻暦頒布始祭が箭弓稲荷神社(前原利雄宮司)記念館にて肅行されました。

比企支部は、六部会三十支部で構成されており、本年は吉見部会の担当で、竹井秀利副支部長が斎主を務め、澤田稔行・木村富美子が祭員を奉仕し、奏楽は比企雅楽会により執行されました。

岡部憲夫支部長、根岸豊比企郡市連合神社総代会長以下各支部総代の代表者等六十名が参列いたしました。

祭典終了後、神宮大麻全国頒布百五十周年

の記念すべき年に当たり、比企支部及び前原利雄箭弓稲荷神社宮司、嶋本正雄箭弓稲荷神社責任役員が優良頒布者として表彰された報告と、根岸総代会長より参列者に増頒布の決意が述べられました。

例年であれば祭典終了後、紫雲閣にて直会を開催し、総代各位に頒布増体をお願いするところではありますが、コロナ禍の影響により令和二年より三年間中止となり、一日も早い感染症の終息を願うところであります。

(比企支部事務局長)

### 秩父支部

淺 見 知 史

秩父支部では、例年十月下旬の秩父郡市神社関係者大会に併せて神宮大麻暦頒布始祭を肅行しております。神宮大麻暦頒布始祭は、支部管内の青年神職会が奉仕する慣例として、本年も十月

二十一日、斎主を藪田建秩父神社権宮司、祭員・怜人を茂

木一姫秩父青年神職会長以下会員のご奉仕により肅行いたしました。コロナ禍以前



秩父支部 神宮大麻暦頒布始祭

は、管内各社の総代三百名前後の規模でしたが、ここ三年間は郡内神職・郡市総代会役員等約一〇〇名に縮小して開催しております。

当支部の頒布地域は、秩父市・横瀬町・皆野町・長瀬町・小鹿野町です。その一市四町の約三万七千世帯に対し、二万三千体を頒布しております。頒布率六〇%を超えながらも、過疎化による人口減少や神職並びに総代の後継者不足に直面し、今後は祭祀の継承が途絶える地域も予想されるなど、問題は山積しております。

(秩父支部事務局長)

### 大里児玉支部

中 山 真 樹

大里児玉支部の神宮大麻暦頒布始祭祭は、支部全体としては行っておらず、支部内が一区は熊谷市(熊谷市・旧大里町・旧江南町・旧妻沼町秦・長井地区)・深谷市(旧川本町本島地区)、二区は寄居町・深谷市(旧花園町・旧川本町武川の西部地区)、三区は深谷市(深谷市・旧岡部町・旧川本町武川の東部地区)・熊谷市(三ヶ尻・別府・旧妻沼町妻沼・男沼・太田地区)、児玉区は本庄市・上里町・神川町・美里町という四つの分区に分かれており、各区ごとに祭典を行っています。一区、二区、三区(旧大里支部)では、神職が参列し、それぞれの区内各社の筆頭総代を招き、更に支部総代会長並びに各区の区長を

来賓としてお招きし、祭典を行っています。しかし、ここ数年はコロナ禍のため、筆頭総代や来賓を招かず、規模縮小での開催に至っています。

児玉区(旧児玉支部)では、区長が齋主を務め、区内の宮司が参列し、区総代会の正副会長を来賓としてお招きし、祭典を行っています。

神宮大麻の頒布数は、支部として年々減体傾向にあります。各宮司を始め神職・総代が減体に歯止めをかけるべく、力を合わせていく所存であります。

(大里児玉支部事務局長)

## さきたま支部

渡邊 敏明

さきたま支部では、十月二十日埼玉県神社庁にて神宮大麻頒布始奉告祭を齋行いたしました。祭典は、渡邊秀男副支部長が齋主を奉仕し、支部長以下神職十名と総代会長以下総代三名が参列しました。また、馬場裕彦本宗奉賛委員長にもご参列いただき、同委員会が進める神宮大麻頒布施策「OneポイントUP」運動についてご説明いただきました。また、さきたま支部は、「三ヶ年継続神宮大麻都市頒布向上計画」重点施策地域の三年目を迎え、施策として忌服についてのリーフレットを発行しました。当支部では、忌服を理由に神宮大麻を辞退される家庭が多く見受

けられることから、今回新たに分かりやすいリーフレットを発行いたしました。

当支部では、こうした活動を通じて神宮大麻奉斎の意義を丁寧の説明し、一体でも多くの神宮大麻を頒布していきたいと考えております。



さいたま支部 神宮大麻頒布始奉告祭

(さきたま支部事務局長)

## 埼玉東支部

恩田 宏典

十月二十五日、神社庁にて松島寿人齋主、高橋信和副齋主の奉仕により、高梨佳樹支部長以下支部神職二十名、大野光政総代会長以下総代会役員九名の参列にて、埼玉県神社庁埼玉東支部神宮大麻頒布始奉告祭を齋行した。最後に神宮大麻が齋主から支部長、次いで、支部長から大野総代会長に授与され、無事終了した。

祭典終了後、本宗奉賛委員会の企画として神宮大麻に関する意見交換会が行われた。始めに馬場裕彦本宗奉賛委員長の挨拶に続き、小林威朗本宗奉賛委員会常任委員の進行にて、参加者を六名程度の班に分け、約一時間、神宮大麻を頒布する者、受ける者と様々な立場から御神札をどのように捉えているか自身の言葉で意見を交わし、その意見を班ごとに発表していただいた。

この企画は意見・問題点に対しその場で答えを導くのではなく、神宮大麻全国頒布百五十周年記念を節目に、神社が次世代に向け、様々な視点から時代に沿った教化活動を模索することを目的とするものであり、各神社でその様々な意見を踏まえ教化、神宮大麻頒布向上に役立てていただきたい。

(埼玉東支部事務局)

## 神宮大麻に関する教化の課題と展望

### ―埼玉東支部の意見交換会を切り口に―

本宗奉賛委員会 常任委員 小林 威 朗

前記(六頁)の埼玉東支部神宮大麻頒布始奉告祭報告にある、神宮大麻に関する意見交換会から見えてきた教化に関する課題と展望について報告したい。

#### 意見交換会の概要

当日では意見交換会に先立ち、馬場裕一君による「埼玉からのお伊勢参り」と題して講演を行った。これは、埼玉県域の人々がどのように神宮を崇敬し、どのような心をもって実際に参宮をはたしてきたのかを理解するためのものである(十三頁参照)。

その後、「神宮大麻」や「大麻頒布」に関する意見交換会を行い、本宗奉賛委員会の活動に役立てることとした。ここでは、二十九名の参加者を五グループに分け、参加者一人一人が「大麻頒布」と聞いて思い浮かぶ、前向きな面と、後ろ向きな面を、それぞれ記入した。当支部での意見交換会においては、ブレインストーミング法という集団での課題の抽出方法を用いた。

そして、各班の進行役が「前向きな意見」と「後ろ向きな意見」を「神社の内部的」要素と「外部的」要素に分別しながらまとめていった。

その結果、「内部的」「外部的」要素において、「前向き」意見は共通して大麻頒布が「接点・きっかけ」になることを挙げている。例えば、「内部的」要素では「神宮大麻を通して氏子地域のつながりを感じる」「参拝者との接点」との意見であり、「外部的」では「大麻頒布の時にしか会わない人がいる」「直接顔を合わせる機会」というものがあつた。

同様に「後ろ向き」意見も共通している部分があり、それは「説明が難しい」という点である。例えば、「内部的」要素では「必要性を理解してもらうような説明が難しい」との意見があり、「外部的」では「地元の神社は近くにあるが、伊勢は遠いため存在意義を伝えることが難しい(氏神様のお札だけと言われたいまう)」という意見があつた。

ただ、「後ろ向き」意見については「内部的」「外部的」にそれぞれ特徴がある。「内部的後ろ向き意見」では、準備や体制についての意見が多く「大麻の余りについて」、「ノルマに感じる」、「準備が大変で一か月早く神宮大麻が届いたらありがたい」、「神社側から神宮に対するアプローチが弱い」、「神宮大麻に関して、神宮側の熱意を感じない」などがあつた。

「外部的後ろ向き意見」では家や地域の課題を指摘するものが多く「家業が継承できず、家の神棚を神社に納める方が増えている」や「地域に配ってくれる人がいない、次の人を探すのが大変」という意見があつた。

このように分類すると、「後ろ向き意見」は「神宮大麻」や「大麻頒布」について眼前の問題点が多いことを示している。他方で、「前向き意見」で最も多かったのは、「信仰心」に関する意見であつたことも特徴といえる。例えば「一年間家庭を護っていただけの安心



代表者による意見発表会

感「日本人の心を一つにするための大切な行動」「日本の総氏神であって日頃の感謝を伝えることで日頃からお守りいただきたい」といった、意見がそれである。

## 課題

以上のことから、次の課題が考えられる。まず、神宮大麻に関する説明の難しさを克服するとともに、氏神社と神宮の結びつきを強固にするような教化の方法・体制が必要である。説明の難しさを克服することによって、多くの総代・神職が考えている「接点・きっかけ」として大麻頒布を活かすことができるようになり、それがやりがいにもなる。それと同時に、大麻頒布の体制について埼玉県の本宗奉賛委員として改善を要望することはできないか。例えば、神宮における大麻頒布始祭を一か月早めてくれるように要望することができれば、準備の大変さを緩和できるかもしれない。

これらの試論を、多くの先輩諸賢から意見を取り入れながら、「信仰心」に重きを置いた大麻頒布が行えるようになれば、大麻頒布に従事する方々に役立つような施策を見出せるのではないかと考える。

## 展望

これまでの増頒布に対する基本的姿勢は「努めて氏子各戸を歴訪すること」であったと思われるが、今日の世間一般において「宗

教(的なもの)」を忌避する傾向は顕著であるとともに、個人化した住環境に他者が訪問してくることに嫌悪感を払拭することは困難であるように思われる。

そこで、視点を変えて、すでに神宮をはじめとした神社に興味を持っている人々に対しての教化から始めるべきではないか。つまり、この人々(神宮大麻を受けている可能性はあるが)に対して教化をすることで、その影響力は確実に増すと考えられるということである。こういった施策を、神宮に参拝している埼玉県民に対して行うことはできないであろうか。

例えば、夏休みなどの時期に、神宮の境内で埼玉と神宮を結ぶようなパネル展示をしながら、昔の参宮や御師の活動について、みやげものや当時の楽しみなどを含めて説明してはどうであろうか。

そういった信仰の伝統が「神宮大麻」として今でも神棚に現れていることを示して、「家に神棚(神宮大麻)」を祀ろうというような精神的な流れを作っていくことはできないであろうか。このときに、可能であれば、神社庁の「氏神検索」を持って神宮へ行き、興味を持った人の氏神様をすぐさま検索できるようにするとより良いと考える。

本宗奉賛委員会の活動によって、神宮へ参拝した人々が、氏神社に参拝しようとする流れを創出できたならば、県内神職からの信頼関係構築につながり、ひいてはより積極的な教化活動への原動力ともなると考えられる。

## むすび

神社界の大切にしてきた信仰は、生活の中に息づくことによってはじめてその意義や意味を実感することができる。そのことは、今日まで神道教化の抛り所としてきた「敬神生活の綱領」に明らかである。そしてこの信仰は、当支部の意見交換会で総代・神職が口々に神宮大麻に対する「感謝」や「ありがたさ」を述べていた信仰そのものでもある。しかし、この信仰を「生活」の中に息づかせるということは、新たな氏子・崇敬者に対して本当の意味で理解してもらおう(理解をうながす)ためには、それ相應の時間と説明、そして実践を要するということでもある。

令和五年(二〇二三)は明治元年(一八六八)から数えて百五十五年になる。そして、終戦の昭和二十年(一九四五)から数えて七十八年になる。したがって、明治から終戦までの期間より、終戦から今日までのほうが長くなったのである。この新しい時代の幕が上がろうとしている秋に当たり、これまで培ってきた伝統的信仰を再確認すると共に、積極的に果敢に、新しい教化活動に乗り出していくべきだと思ふ。

(久伊豆神社 禰宜)

# 伊勢神宮新穀感謝祭

## 参列について

鈴木敬臣

伊勢神宮崇敬会が主催する「伊勢神宮新穀感謝祭」は、我が国の総氏神と仰ぐ「お伊勢さま」へ、大御神の限りない御神恩と五穀をはじめとする食物の恵みに感謝の真心を捧げるお祭りです。毎年十一月から十二月にかけて開催されており、期間中には全国より多くの神職・総代・氏子崇敬者が集い、大御前を拝しております。「飽食の時代」という言葉に象徴される物の豊さの中で、食物に対する感謝の気持ちが薄れ、その一方では食糧の自給に対する不安が言われる今日にあって、大変意義ある行事となっております。

これまで埼玉県全体としての参列は行っておりませんが、前期より神宮大麻増頒布や参宮促進運動の取り組みの一つとして、令和二年には第六十五回新穀感謝祭に参列しました。その後、新型感染症が流行し、旅行を自粛しておりました。

この度、役員改選による新体制となり、神宮大麻増頒布や次期遷宮を見据え、参宮促進運動を展開すべく、改めて第六十八回伊勢神宮新穀感謝祭に参列し、お祭りの意義や行程について理解を深めることとしました。今回の参列は、高麗文康庁長、東秀幸副庁長、大野光政県総代会長を始め、支部長や本宗奉賛

委員会常任委員の計十三名となりました。今回の参加者を中心に次年度以降、支部単位、神社単位にて広く参列勧奨を行える体制を整え、より多くの方々に神宮にお参りいただくことで、神宮大麻・暦の頒布活動と家庭祭祀の振興に寄与することを目指しております。

次年度の参列勧奨を行うにあたり、今回の参列行程について説明します。十二月八日午後一時二十分宇治山田駅に集合し、以降、貸切バスにて移動しました。先ず、二見興玉神社を正式参拝し、興玉神石と呼ばれる霊岩に茂った御霊草無垢塩草にてお祓いを受け、浜参宮を済ませました。浜参宮とは、二見興玉



二見興玉神社 正式参拝

神社を参拝し、伊勢の神宮へ向かうことを意味し、古来より二見浦一带は禊浜とも呼ばれ、伊勢参宮を控えた参拝者の心身を清める禊場でありました。その後、外宮神域に建つ「せんぐう館」を拝観し、実寸大の御正宮御扉や棟持柱が展示されており、その大きさに圧倒されました。

翌九日は、午前八時から外宮を特別参拝し、内宮では、内宮特別参拝と御神楽奉納を行いました。特別参拝とは、御垣内で参拝することを意味し、参宮団で気持ちを一つに清々しく参拝することができました。昼食後、神宮会館大講堂において、式典に参列しました。式典では、敬神の念篤く農業の発展に功績のある者に対し、農事功労の顕彰が行われました。式典後、宇治山田駅で解散となりました。

このように式典当日の行動以外は支部単位や神社単位で自由に決めて行程を組むことが出来ます。また、参列したいけれども、個人や少人数では不安があるという場合は、神社庁においても参宮団の行程をお示しいたしますので、こちらでの参加を勧奨したいと考えております。今後、継続して取り組むことで、一人でも多くの方にお伊勢参りを体験していただきたいと思います。

江戸時代には多くの庶民の憧れであったお伊勢参りは「お蔭参り」とも呼ばれ、不自由な状況にも関わらず、年間六十万人もの人が参詣していました。時代は変わり、交通の便も良くなり、個人でも気軽に伊勢参りがで

きるようになりまして。本年は埼玉県神社庁として本事業の参宮団を結成する予定ですので、御垣内参拝や御神楽奉納を通じて、心をついに、大御神様に感謝の真心を捧げましょう。

(埼玉県神社庁 録事)



伊勢神宮新穀感謝祭 会場



伊勢神宮新穀感謝祭 農事功労者の顕彰

### より強くなった祖国への思い

梅林 テチャナ

児玉郡上里町鎮座菅原神社権禰宜の梅林テチャナと申します。まず、昨年二月二十四日に私の祖国であるウクライナへのロシアによる侵攻を受け、いち早く行動に移してくださいました県神道青年会の皆様、現在も募金を続けてくださっている寶登山神社様、またご心配をおかけしましたそのほか多くの県内外の神社関係の方々に、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

私の故郷はウクライナの西部、カルパチア山脈のさらに南西部、ルーマニアとの国境にほど近い山に囲まれた町であるため、幸いなことに現時点では被害はありません。このため、国内各地から避難してきた人々が多数おり、町の人口は一時、数倍に膨れ上がりました。そのような地域でも防空警報は鳴り響き、電力不足のため計画停電も実施され電気が使えるわずかな時間に家事を済ませなければならず、生活に大きな影響が出ています。

侵攻が始まった当初はテレビで流れる映像だけが情報源でした。祖国に四方からミサイルが次々と打ち込まれ街が破壊され、ロシア軍の戦車が隊列を組んで幹線道路を進み、民間人が殺害されていく様子を目の当たりにするのはまさに悪夢でした。私が男性だったら祖国へ戻り、参戦していたかもしれませんが、このようなことを思ったのは私自身初めてです。戦争で良いことなど何一つありませんが、これを機に国民が一致団結したことは意味があったと考えています。愛国心の薄かった人までもが、国を失うわけにはいかないという気持ちを持っていました。日本を含む国際社会の支援のおかげでウクライナという国は今このところ辛うじて存在することができています。国を維持しつつ戦争を終わらせるためには今後も継続した支援をいただくことが必要なのですが、各国の事情によりそれが止まってしまうことを今は危惧しています。

私は三年前に國學院大學の講習会を受講し、神職資格をいただきました。外国人である私を受け入れてくださった神社界の懐の深さに感謝しています。今の私にできることはお社へ参拝に来てくださった方と共に平和を願ひ神様に頭を下げることで、小さな力ですが、より多くの方にウクライナの問題に関心を持ち続けてもらいたいと思っています。

(菅原神社 権禰宜)

# 埼玉県神社庁新嘗祭

新嘗祭が十二月十六日午後一時半より神殿にて斎行されました。埼玉東支部の奉仕にて、高梨佳樹支部長が斎主を務め、高麗文康神社庁長が参列者を代表して玉串を奉りて拝礼、参列の役職員十五名が合わせて拝礼し、五穀豊穡への感謝の祈りが捧げられました。祭典終了後は午後三時より役員会が開催され、その後一の屋にて懇親会が行われました。

## 新嘗祭次第

時刻、参列者所定の座に著く 是より先手水の儀あり  
時刻、斎主以下祭員、参列者代表参進 是より先手水の儀あり  
次に斎主以下祭員、参列者代表所定の座に著く  
次に修祓

次に斎主一拝  
次に斎主御扉を開き畢りて側に候す  
次に祭員神饌を供す

次に斎主祝詞を奏す  
次に斎主玉串を奉りて拝礼

次に参列者玉串を奉りて拝礼

一、埼玉県神社庁代表 神職列拝  
次に祭員神饌を撤す

次に斎主御扉を閉じ畢りて本座に復す  
次に斎主一拝  
次に直会

## 【奉仕員】

齋主	第六天神社宮司	高梨佳樹
副齋主	久伊豆神社宮司	馬場裕彦
祭員	彦江神社宮司	鈴木重臣
祭員	水川神社欄宜	恩田宏典
祭員	久伊豆神社欄宜	小林威朗

## 令和四年度「教養研修会」開催のお知らせ

期 日 令和五年三月二日(木・赤口)

開催方法 埼玉県神社庁講堂における研修及びWEB会議システム(Zoome)を利用した遠隔研修を併用した研修

対象者 県内神職

参加費 千円(支部にて一括納入ください)

研修主題 『神社の存在意義を考える』

開催趣旨

神社は、地域の共同体の中心として存在し、神社に集う氏子の奉仕により支えられ活動してきた。しかしながら、核家族化が進み、高齢化や過疎化とも相俟って氏子の神社離れが大きな課題となっている神社も多い。氏子の神社離れは神社の活動基盤を揺るがす問題である。その結果、神社が不活動状態に陥ってしまうことは神社界にとって大きな問題であろう。この問題解決への取組として過去の歴史を学び、現在の全国神社の状況を把握することは、神社の果たすべき役割を再認識し、現代社会にあった「新しい時代の神道教化」を図ることができないのではないだろうか。

神社本庁では、令和二年度から四年度の教化実践目標の一つとして、「神社の公共性を顕現し、祭祀を通じて地域社会との連携を深め、神社と地域の活性化に努める。」と定めた。本年、この教化実践目標を取纏め、成果と課題が報告された。そこで第一講では、神社本庁の教化施策について、今求められている現代社会における神社の役割と神職が果たすべき役割について学ぶ。第二講では、明治四年の「神社八国家ノ宗祀」であるという政府の表明から始まった神社政策は、府県社以下神社の合祀を進めるものとなり明治後期から大正初期にかけて積極的に行われた。しかし、この政策は氏子の主体的意思に関わらず行われた為、神社を合祀されてしまった住民が地域に神社を復旧し再建する神社復祀の動きも多数見られた。こうした歴史を踏まえて、神社に対する氏子の思いを再確認し、神社の存在意義を考えたい。第三講は、第二講に引続き神社合祀によって生じた地域住民の思いについて、県内の事例を中心に取上げる。昭和五十六年より着手した『埼玉の神社』を刊行する為に行われた埼玉県神社庁調査団の調査資料を元に、神社合祀により翻弄された県内各地の様々な事例を取上げ、神社維持の為に動いた氏子の思いと行動について学ぶ。

講 師

申 込

櫻井治男先生(皇学館大学名誉教授)  
高橋寛司先生(埼玉県神社庁学芸員)  
二月十七日(金)締切

※支部事務局宛にお申込みください。

告知

「神主さんと神社を学ぼう！」について

高橋陽一

三月二十六日(日・赤口)、武蔵一宮氷川神社において、「神主さんと神社を学ぼう！」を開催いたします。

「神道入門講座」「神社と疫病」「神社と神話」と題した講演、氷川神社職員による境内案内、御朱印帳作りや祓詞浄書体験、神話カレンダー原画展、雅楽演奏、神楽舞、川越祭りばやし、神話デジタル紙芝居等、過去の開催で好評だったものを継続して行います。なかでも人気の高い「埼玉の神社 御朱印展」ですが、コロナ禍で大幅な進化を遂げております。前回開催から御朱印にどんな変化があったのか、皆様の反応が今から楽しみです。新たなコンテンツとして、渋谷ヒカリエなどに店舗を持つ『神棚の里』による神棚の展示、販売を行います。この神棚の造形と発想は、今後の神社界発展の鍵になると感じしております。

この日は関わった人々、神職にとつて特別な日になると思います。神職各位のご理解とご協力を宜しくお願いいたします。

(教化委員教化広報部 班長)

庁務日誌抄

Table with columns for date, event name, location, and staff. Includes entries for '日本会議埼玉本部越谷支部総会', '武田参事出席', '高麗本部長以下九名出席', etc.

Table with columns for staff name, position, and date. Includes entries for '令和五年 歳旦祭・元始祭', '令和四年十一月一日', '令和五年十月三十一日', etc.

# 埼玉からのお伊勢参り

## —平野家文書「伊勢道中日記覚」より—

埼玉県神社庁青年会 総務局長 馬場裕

はじめに—

平成三十一年から令和三年にかけて、埼玉県神社庁青年会(小林威朗会長・鈴木智之会長)にて実施した「埼玉県における伊勢神宮参詣資料の調査」では、八七五社の神社境内における約三千点に及ぶ伊勢参宮に関する石碑や灯籠、絵馬などの資料(以下「参詣資料」)を収集し、『埼玉県の伊勢講』として発刊した。その巻末資料として、埼玉県立歴史と民俗の博物館寄託、平野家文書「伊勢道中日記覚」(以下「日記覚」)の翻刻を埼玉県立図書館主席学芸主幹新井浩文氏に校正いただき、掲載することができた。この「日記覚」は、岩槻の商人平野忠兵衛が、講中十二名に加え、供の者五名の総勢十七名にて伊勢参宮を果し、さらに諸国の名所旧跡、景勝地を巡る約三ヶ月の旅を記録したものだ。



「伊勢道中日記覚」表紙

さて、令和四年十一月七日〜九日、東京日本橋の三重テラス(三重県のアテナショップ)にて神青協一都七県協議会主催、神宮大麻全国頒布百五十年記念「神宮写真展」が開催され、その中で「日記覚」の道のりを幅四五メートル、高さ二・一メートルの地図パネルに表し展示した。また「関東からのお伊勢参り」と題して一日に三回ずつ講演をし、参宮における貴重な体験が伊勢神宮崇敬の文化を築き、その結果、関東各地には身近な文化財として「参詣資料」が存

在すること、神棚の中央に神宮大麻が祀られていることなどを一般の方向けに説明した。本稿では、「神宮写真展」出展に際し、整理した「日記覚」の行程をもとに、要所を紹介する。(日付は旧暦)

### —参宮の行程—

#### 江戸

天保十年(一八三九)正月二十八日、国元を立出し、草加宿を経て千住宿に泊。二十九日「浅草観世音三社大権現参詣」二月一日「芝神明、増上寺、あたご、高輪庚申参詣」と江戸観光から旅は始まる。

その後は、東海道を進み「大師河原厄除大師」(川崎大師)や藤沢の遊行寺を参詣し、平塚、小田原を経て箱根へ至る。

#### 箱根(静岡)

二月三日、箱根湯元の温泉を満喫。四日はいよいよ峠越えである。「文庫山」子山からの絶景と名物あま酒に舌鼓を打ち、箱根神社では「曾我物語」ゆかりの太刀や「赤木柄短刀」(現在は重要文化財)などの御神宝を拝見し感激の様子、そして「御関所御手形差出罷通」、次の目的地は三島大社となる。



講演の様子

二月五日「富士山正面、其の外四方に山々みはらし絶景也」の原宿や「田子浦山邊赤人哥をよみし処」の吉原宿を経て、六日、興津宿の清見寺、久能山東照宮を経て龍華寺では「此庭より三保の明神松原ふじの御山、箱根、伊豆山、遠江など所々山々其外梅川共見はらし此景色言語(ことば)盡(つ)がたし」と記録している。七日「府中浅間様参詣いたし(略)裏の御山まで上り見渡七六御城下町二安部川所々見はらし景色也」と綴っており、東海道の素晴らしい景色を伝えている。

#### 秋葉山

二月八日森宿にて一行は「山坂も多し是町より秋葉・鳳来寺・豊川稲荷参詣所迄相通り夫よりご油宿迄通り」と決意を固め、険しい秋葉道を進む。九日、秋葉山本宮では「青銅の鳥居・三王門・石燈籠其外木燈籠数不知候、秋葉山観世音菩薩経堂所々参詣いたし」とあり、至高の秋葉信仰を目の当たりにする。

十一日、鳳来寺参詣。十二日、豊川稲荷参詣、御油宿を経て岡崎宿に泊。

健脚な江戸時代の人でも百キロメートルを超えるわらじでの登山は、相当厳しいものであり「大難所」や「甚難儀致」などと記され、時には駕籠も利用したようである。

#### 名古屋

二月十三日、「熱田大明神参詣 社領壹万石あり、御屋根皮わだ葺大社 同末社多し参詣、石燈籠木燈籠多し数不知、殊に大社なり」と記し、名古屋城では「御城主尾張大納言様 御高六拾壹万九千石御城内殿守在り、屋根二金のしやちほこあり、大キサ九尺余、誠二以御名城也」と驚きの様子。十四日、津

鳥神社では「牛頭天王日本一の惣社也(略)社領千三百石也(略)石燈籠木燈籠宝物多し」と中京の神社やお城の迫力を表している。その後は舟にて桑名行き、伊勢を屈指した。

伊勢

二月十六日、松坂宿では伊勢の御師龍太夫の手代が「酒肴」を用意して出迎えていた。さらに、十七日、伊勢の境の宮川まで約五キロメートル地点にある新茶屋では、五人の手代の出迎えを受け、「酒肴」に加え贅沢な「中喰(昼食)」を「種々御馳走」になり、そこから用意された駕籠に乗り、宮川の渡舟は「無賃」にて渡してもらった。なお、当時、こうした駕籠は赤毛氈が敷かれた飾り駕籠であったといわれており、一行の参宮への期待は一層高まったに違いない。

いよいよ、伊勢神宮外宮の門前町にある龍太夫の邸宅に着き「御茶菓餅三ツ吸もの酒肴種々丁寧なる御馳走」という歓待を受け、翌十八日は「両大神宮」並びに「御末社宮参り」を果し、「浅熊岳本尊虚空蔵菩薩」(金剛證寺)さらに「二見大神宮江参詣」した。なお、この日は三人の手代が同行し、所々の茶屋にて「御茶菓子酒肴御ぜん(または「弁当)」種々御馳走に相成」と御師の計らしい様子が窺える。途中、「御夢想之万金丹妙薬、但し巻粒三文ツツ」という一文があり、現在でも購入できる「万金丹」に約二百年の時を一時にして縮められた思ひである。

翌十九日は「太々修行、社人男衆七十八人 神女式十人前、百人斗りにて御神楽興行せられ 太々修行 首尾能相調申候」と百名にも及ぶ神職や巫女による盛大な御神楽が挙げられ、「夫より客座引 帰り御儀式之御吸物 御酒 御肴 其外御膳が三之膳付にて種々諸講成 御馳走に相成 誠以難有

事」と豪華なものでなしを受け大感激の様子、詳しくは「絵図書」に残したとある。(現存せず)

翌二十日には、岩戸山(現在は入ることができない外宮奥の神域)に参詣。

二十一日昼頃、駕籠に乗って出立するが、宮川手前の茶屋においても「種々馳走に相成」、「御師家老職」をはじめとする「六七人」の手代に舟渡しまで見送られ、「誠に大願成就なり」と結び、伊勢を後にしている。

奈良

二月二十四日、長谷寺を参拝した一行は、名物「そふめん」を昼食にとり「三輪明神参詣 御神体山を拜ス」。さらに、二十五日奈良町に泊り、興福寺や「春日大明神」を参拝し、東大寺では「大仏」や「日本一のつりがね(鐘楼)」を見学した。二十六日、法隆寺では「聖徳太子の御建立也、此寺太子必見の堂あり 大和一番の大からん所也」と大感激の様子である。その後は、「龍田大明神江参詣」の後、右手に「天のかく山」を見ながら飛鳥方面へ。二十七日、飛鳥を経て多武峰へ。

吉野

二月二十八日、桜のベストシーズンにあたり、「吉野山 桜景色」を背景に、源義経、後醍醐天皇ゆかりの地を巡り、「花さかり 山は日頃の朝ぼらけ」と芭蕉



「伊勢道中日記覚」 御師邸での太々神楽奉納

の歌が漏れるほどの絶景を目の当たりにした様子である。大迫力の御本尊は「本尊蔵王権現御丈ケ右式丈四尺、中式丈六尺、左式丈式尺」と記録されるなど、詳細な説明が見られることから、案内人を頼んだ模様である。

二十九日、高野山では、奥院の弘法大師を参拝し、数多ある諸大名奉納の燈籠や戦国武将の墓に驚きの様子である。

二月晦日、三日市を経て堺へ。

大坂

三月一日、「妙国寺(略)日本一之そてつあり」「住吉四社明神参詣」「天王寺七堂大からん所」「生玉明神」参詣。さらに、銀米大妻大豆綿の相場が記され、商人としての経済感覚を窺わせる場面もある。また、「土産の風呂敷ハ大坂にて求め可被成候 京都は至て高直(値)なり」と後輩へのメッセージともいえる一文を残している。二日、「御城代拝見」。

復路では三月十八日、道頓堀でゆつくりと「角の芝居」を見学、「中村富十郎」他多くの役者が出演した様子を伝えている。十九日大道芸を一見し、座敷遊びをした模様で、「西国の中程前懸ハ紅縮緬(略)殿方甚し」と大賑わいの様子に感心している。

姫路

三月三日、「西の宮大神宮」幾田大神宮等を参拝し、兵庫宿泊。四日、須磨寺にて源平合戦にちなむたくさんの宝物等を拝観の上、「一ノ谷」「二ノ谷」「三ノ谷」坂落しの場所を見学し、明石に泊。五日、「柿本人丸大明神」や「石玉殿」を参拝、高砂町の「相生の松」や曾根の松を見学後、「御城主酒井雅樂頭様 知行拾五万石也」と城主の名前と石高を書き留め、和泉屋

文治郎へ宿泊。六、八日は西国街道を通り岡山へ。播州路は、伝承と景観への興味を満足させたようだ。

復路は三月十七日にかけて大坂へ戻るが、往路とは道を変え、十三日「赤穂義士四十七人の墓所あり」の花岳寺を参拝し、船路にて室津まで進んだ。そして、十四日、姫路では「此宿酒肴持出し程々丁寧之馳走二預り(略)家内同心切て休み、宜敷宿也」と往路と復路で泊まった宿の感想を記している。

丸亀

最も遠い目的地である金毘羅宮へは、三月九日「瑜加大権現参詣」の後、田の口浦から「丸亀迄海上六里の舟渡し」「暮六ツ(午後七時頃)過より乗出し明七ツ(午前四時頃)過三着致ス」というスケジュールである。十日、「本尊釈迦如来 金堂八再建立中(略)誠三参詣之人々多し」という賑やかな金毘羅宮、さらに「弘法大師御誕生の御所也」の善通寺を参詣した一行は、「路京都へと向う」。

京都

三月二十日、大坂より「淀川拾三里舟二乗 伏見江上り」、余すところのない贅沢な京都観光の始まりである。  
二十一日、藤の森稲荷、伏見の稲荷、東福寺、三拾三間堂、六角堂、嶋原  
二十二日、廣龍寺、嵯峨清涼寺、愛宕山、月輪寺、御室御所、妙心寺  
二十三日、東本願寺、西本願寺、清水寺、祇園社、庚申、知恩院  
二十四日、北野天神、平野社、金閣寺、銀閣寺、御所、吉田社、真女堂、黒谷、南禅寺、金地院  
二十五日、下加茂、上加茂社、貴船大明神、鞍摩山、

八瀬

二十六日、黒谷清龍寺、比叡山唐崎大明神、大津の三井寺を経て草津へ向かう。

滋賀

三月二十七日、草津宿にて「東海道中仙道追分舎是より中仙道ヲ下る」と中山道の山道を行くことにした。さらに、守山宿では、平野家の祖である本家平野七右衛門を訪ねた。あいにく不在だったので、「金一両」を置いてきたが、「本家に御座候間、末々参宮上京之節は立寄可申候事」と子孫へのメッセージを残している。

二十八日、「高宮宿 石の鳥居あり是より多賀大神宮参詣」、さらに鳥居本宿すり針峠を経て、柏原宿に泊。この後は、御獄宿、奈良井宿等を経て、善光寺へ向かうが、毎日のように「山坂多し」や「難所也」と記している。

長野

四月六日、「善光寺如来参詣 其外神社仏閣拜礼(略)御本堂間口拾五間(約二十七メートル)奥行廿九間三尺(約五十二メートル)(略)是日本一ノ如来也」

七日「戸隠大権現四社参詣(略)此御山道筋甚難儀所并中喰銭も差支是又甚迷惑致し候」さらに「雪多く御座候て困り入申候」と、道と昼食、雪に阻まれ困っており、次に参詣する人は「宿より弁当持参にて」と備忘録を残している。八日「朝開帳参詣致し当所出立」として、出立の朝にもう一度参拝し、帰路に就いた。それから、上田宿、軽井沢宿、高崎宿、熊ヶ谷宿、桶川宿を経て、十三日、「連中一同無滞下向致 首尾能御本陣に至着 仕候」として、目出度く七十四日間の旅を締めくくっている。

―おわりに―

江戸時代、「お伊勢参り」は非常に盛んで、特に文政十三年(一八三〇)の「お陰参り」は当時の人口の六分の一にあたる約五百万人が伊勢へ出かけた。「日記覚」は、それから九年後にあたる天保十年(一八三九)の参宮を記録している。文政十三年の「お陰参り」は、着の身着のままの参宮者が多かったようだが、「日記覚」の参宮は「伊勢講」によるものである。講中連名に、岩槻町市宿の名主である「勝田九郎左衛門」の名があることから、宿をあげての「伊勢講」だったものと思われる。江戸時代の岩槻やその周辺では、木綿の生産が発達し、「三州木綿に対抗」(『埼玉新聞』明治四十一年十二月二十二日)するほどであったという。中でも市宿は最大で、木綿問屋が立ち並び、多くの商店が軒を連ねていた。「日記覚」にある太々神楽は、「メ百人斗り」もの神職や巫女による盛大なもので、「御師邸神楽図」などと称する絵画や『埼玉県の伊勢講』に収録した絵馬などに比べて多くの人数で行われたことが分かる。これほど大規模な太々神楽にいくら支出したのか記載がないのは残念である。また、一般的に江戸から伊勢まで二十日程度、往復で四十日、京都大阪へ足を延ばしても五十日から六十日ほどの旅が多い中で、七十四日かけて四国金比羅詣でを果し、各地の名物を食し、案内人を頼んで名所旧跡をじっくりと見て回る旅は、比較的裕福な商人ならではの旅だったのかもしれない。ちなみに、勝田九郎左衛門の名は「武州岩槻木綿問屋中」(江戸本船町・粕壁・騎西・久喜・鳩ヶ谷・岩槻・加須・桶川・幸手などの商人で構成する木綿買次仲間)により、「日記覚」の参宮と同年に建立された三重県津市栗真町屋町の常夜燈にも刻まれている。

さて、国元に帰った一行だが、同年九月の例祭に併せ、氏神である久伊豆神社に灯籠を建立している。そして、約二百年同じ場所でお伊勢参りの記憶を語りかけている。「日記覚」を読むことで、道中における「苦勞」や「喜び」の一端を垣間見た私は、江戸時代の旅に同行させてもらった幸せ者である。一方で、長旅を終えた人々の安堵感は一入のものだったに違いない。「参詣資料」にある、神恩感謝の言葉が胸に染みる。そして、「お伊勢参り」の素晴らしい体験が、神宮崇敬の文化を築いてきたと実感している。現在、神棚の中央に「神宮大麻」が祀られているのは、長く続く我が国の伝統文化を象徴しているといえよう。神青会が調査した「参詣資料」は、参宮の思い出や体験を通じて、後世の人に大切なものを伝えようとした先人の思いの表れなのではないだろうか。



久伊豆神社 灯籠

(久伊豆神社 権欄宜)

参考文献

埼玉県神道青年会編『埼玉県の伊勢詣』

田村均「幕末期の岩槻木綿買次仲間と行田商人」

(令和三年 神社新報社)

杉山正司「関東の伊勢参宮 伊勢参詣記を中心に」  
(「行田市郷土博物館研究報告」第九集 平成三十年)

金森敦子「旅日記に見る江戸の旅」  
(「悠久 第二三五号」平成二十六年 鶴岡八幡宮)

金森敦子「伊勢詣と江戸の旅 道中日記に見る旅の値段」  
(平成十六年 文芸春秋)

鎌田道隆「お伊勢参り 江戸庶民の旅と信心」  
(平成二十五年 中央公論社)

霞会館資料展示委員会編「お伊勢さんと武蔵」  
(平成十九年 社団法人霞会館)

旅の文化研究所編「絵図に見る伊勢参り」  
(平成十四年 河出書房新書)

岩槻市役所市史編さん室「岩槻市史 通史編」  
(昭和六十年 ぎょうせい)

岩槻市役所市史編さん室「岩槻市史 民俗史料編」  
(昭和五十九年 ぎょうせい)

岩槻市役所市史編さん室「岩槻市史 近世史料編Ⅳ 地方資料(下)」  
(昭和五十七年 ぎょうせい)



「日記覚」から作成した旅の行程